

平成24年（ワ）49号 外 玄海原発差止請求事件

原告 長谷川 照 外

被告 九州電力株式会社 外

意見陳述書

後藤 文治

第1 はじめに

私は、乳製品を作る企業に勤め、1966年5月に転勤で福島に来ました。その後福島で結婚し、二人の子供を育て、福島で定年を迎えた後は介護の仕事をして好きな釣りや家庭菜園をして48年間に渡って福島で暮らしてきました。この意見陳述では私のささやかな幸せや友人関係が原発事故によっていかに破壊されていったかについて述べさせていただきます。

第2 震災当時の様子

2011年3月11日の震災当時、私は、妻と長女と3人で福島市内にある団地に住んでいました。東京電力福島第一原発から北西に約60kmのところでした。私の家はたまたま固い地盤の上に建っていたためか、地震の被害はわずかでしたが、その後、食料品や水が不足するという過酷な日々が始まりました。私は、原発が爆発したことや避難指示区域が原発から20キロ、30キロと線引きされる様子をテレビで見ながら、福島市内には何の指示も出なかったため、私たちの住む場所は放射能汚染の心配はないのだと思っていました。

事故から数か月後、私は自宅の放射線量を測りました。すると室内で毎時0.5マイクロシーベルト、庭では1～1.5マイクロシーベルト、樋から流れ落ちる水の所や側溝の砂は3～3.8マイクロシーベルトでした。私はこの数値を見て、福島市内も危ない、政府は信じられない、

ここで生活し続けていいのかと焦りました。自分も被曝している、自分の住む場所も放射能で汚染されていることを痛感したのです。

第3 友人との交流が断たれたこと

私は48年間福島に住み、多くの友と出会いました。私は釣りが大好きで、月に3～4回、友人と溪流釣りや海釣りに出かけていました。息子が小さなころは息子も連れて行きました。相馬の海に行き、カレイやアナゴを釣り、家から30分ほどのところにあるきれいな溪流でヤマメやイワナ釣りを楽しみました。溪流釣りは、「朝駆け」といってよく釣れる夜明けころが勝負です。私は友人と夜明け前から出かけ、午前中の釣りを楽しみ、午後は山を下りながら四季折々の山菜を摘み、家に戻ってから釣った魚や山菜を調理し、それをつまみに酒を飲みました。気の置けない友人と夜遅くまで釣りの自慢話や政治談議に花を咲かせ、怒ったり笑ったりして過ごす時間が本当に好きでした。

私には30年来の釣り仲間と米農家の友人がいます。私は彼の作る米が美味しいので、毎年毎年買って食べていました。私は彼の米をもっと美味しく食べる為に、10キロずつに分けて精米し、精米したばかりの米を炊くようにしていました。

しかし、震災後、私は米への放射能汚染があることを知り、彼から米を買うことができなくなりました。私が彼に「もう米は買えねえんだ。すまねえ。」と言うと、彼は私を責めることもせず、ただ苦笑いしながら「そうだよな。仕方ねえな。」と言いました。私はそのときの申し訳ない気持ちと彼の苦笑いした表情を忘れることができません。

その後、彼とも多くの釣り仲間とも溪流釣りや相馬の海に行くことがなくなりました。決してケンカしたわけでも仲が悪くなったわけでもありません。ときどき会えば笑って話をするし、お互いのことを気にかけています。しかし、何か言い出せない、切り出してはいけない話題があ

るような気がして、酒を飲みながら釣りの話に花を咲かせていたころのような楽しさを感じるものがなくなりました。自分たちが望んだわけでもないのに、友人との関係が少しずつ冷えていくような、消えていくような気がしました。

第4 収穫物を通じた友人との交流が失われたこと

私は、家から5分のところに畑を借り、野菜を作っていました。農家の方が手取り足取り教えてくれて、すくすくと育つ野菜を見ていると、妻や娘に食べさせてやろう、福岡の息子に送ってやろうと家族のことを思い起こすのです。ようやく収穫の時を迎え、獲れたばかりのキュウリのみずみずしさは格別です。ハウレンソウも何もつけずにその甘味だけで美味しく食べられます。スーパーで買う野菜とは全然違うのです。

できた野菜は友人たちにもおすそわけします。「うまいのできたからな。食べてみてくれ。」と野菜を渡すと、友人からは「これ、うちで作ったやつだ。もってけ。」と違って違う野菜を渡されます。たわいもないやり取りですが、お互いの成果を認め合うような気持ちでして、今思えば実にすがすがしいやり取りでした。

しかし、原発事故後、農作物への放射能汚染があることから、私は畑に行くことを止めました。しかし、野菜作りを続ける友人は「線量を測ってもらった。大丈夫だから…」と申し訳なさそうに野菜をくれるのです。私は「ありがとう」と言って受け取りますが、汚染が心配で、どうしても食べられず、悪いなあと思いながらもらった野菜を捨ててしまったことがありました。以前のようなすがすがしいやり取りが友人への後ろめたさや罪悪感に変わってしまいました。

第5 孫に福島を見せたかったこと

妻と長女と私は、長年住み慣れた福島の家を離れ、今年の3月、息子夫婦と孫が住む福岡に来ました。福岡に来た当初、公園で遊ぶ楽しそう

な子どもの声が聞こえたとき、私は驚きました。私は、事故後の福島で、外で遊ぶ元気な子どもの声をずっと聞いていなかったのです。

私の孫はもうすぐ2歳になります。その孫は福島に来たことはありません。あの事故が無ければ、私は孫に「うつくしま」と呼ばれる福島の豊かな自然を見せたかった。私がかつて息子と行ったように、孫と一緒に山に行きヤマメを釣りたいかった。相馬の海を見せたかった。そして、私達が福島で食べている同じものを、私が作った野菜を孫にも食べてもらいたかった。おじいちゃんやおばあちゃんが福島でどんな生活をしているのか、孫にも味わって欲しかったのです。

第6 さいごに

私はこの世に生を受けてから、社会の一員として真面目に人生を歩み、家庭を持ち、何十年とかけて人との絆を、信頼関係を築いてきました。家族、友人、同僚と、互いに助け合いながら楽しく人生を送ろうとしてきました。私が長い人生の道のりで作り上げてきた平凡でごく普通の生活、家族との暮らし、友人と行く釣り、酒を飲みながら交わすたわいもない話、友人の作った米やみずみずしいキュウリを食べ、野菜を渡しあう時の友との会話。これらが私のかげがえのない宝であり、私の最大の幸福です。しかし、原発事故は一瞬にして私の幸せを奪い去りました。私はその原発を憎んでいます。そして私は、誤った判断をし続けてきた電力会社と政府を信用していません。玄海原発が、そして全国の原発が動くことは、どれだけの小さな幸せを奪うことになるのか裁判官に想像していただきたい。憲法は、一人一人を尊重し、それぞれの幸せを追求することを保障してくれていると聞きました。もう二度と私の小さな幸せを奪われたくない。原発を認めず、この私の普通の生活を保障していただけるようお願いしまして私の陳述を終わります。

以上